

## 人間学の探究 (8) ～人間の定義 (2) ホモ・ロクエンス～

山 岡 政 紀

### 1. はじめに～人間の定義の多様性

人間の定義を、ラテン語 *Homo* を用いて議論することはもはや人間学史において共有された慣習となっている。その端緒はホモ・サピエンス (*Homo sapiens*, 英知人) であった。日本語では「叡知人」「知恵ある人」とも訳される。18世紀スウェーデンの植物学者リンネ (*Carl von Linné*, 1707-78) は、当時の生物学において既に確立されていた学名の命名法、即ちラテン語による属を表す名詞と種を表す形容詞による二名法を用いて、現代の人類に対してホモ・サピエンスの学名を付与した (*Linné* (1735) 『自然の体系』)。名詞 *Homo* は属名であり、形容詞 *sapiens* (知恵のある) は種名である。*Homo* 属には過去に他種の人類が存在したとされ、それぞれに異なる形容詞を付与してホモ・ハビリス (*Homo habilis*, 器用人) やホモ・エレクトゥス (*Homo erectus*, 直立人)<sup>1</sup> 等と称しているが、それらはすべて絶滅し、現在、*Homo* 属にはホモ・サピエンス一種しか存在していない。つまり、形容詞 “*sapiens*” は現代まで生き延びた我々人類を定義づける決定的な特徴として付与された名称であったことになる。

その後の多くの哲学者、思想家らによって、*Homo* を修飾する形容詞がさらに別の形容詞に言い換えられ、今日まで百家争鳴の人間定義論争を成してきた。それらのうちの主たるものを示したのが [表1] である。このうち、本

稿の前編に当たる山岡 (2009) では5件について取り上げて言及したが、本稿ではホモ・ロクエンス (Homo loquens, 発話人) について集中的に考察することとする。

表1 人間の定義と初出出典の一覧

人間の定義, 和訳	初出の出典とその著者	考察
Homo sapiens, 英知人	スウェーデンの生物学者リンネ『自然の体系』1735	前稿
Homo loquens, 発話人	ドイツの哲学者ヘルダー『言語起源論』1772	本稿
Homo oeconomicus, 経済人	イギリスの経済学者スミス『国富論』1776	
Homo phaenomenon, 現象人	ドイツの哲学者カント『純粹理性批判』1781/1787	前稿
Homo noumenon, 本人		
Homo faber, 工作人	フランスの哲学者ベルクソン『創造的進化』1907	前稿
Homo ludens, 遊戯人	オランダの歴史家ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』1938	前稿
Homo petiens, 苦悩人	オーストリアの精神科医フランクル『苦悩する人間』1950	前稿
Homo significans, 記号人	フランスの文化記号論者バルト『エッセ・クリティック』1964	
Homo religiosus, 宗教人	ルーマニアの宗教学者エリアーデ『世界宗教史Ⅱ』1976	

## 2. ヘルダーのホモ・ロクエンス

人間の定義におけるホモ・ロクエンスは、ホモ・サピエンスからの変更が最初に提案されたという意味において「第二の人間の定義」であり、かつ、その後も多くの哲学者、言語学者がこれを標榜して論議したことから、ホモ・サピエンスについて二番目によく知られた人間の定義でもある。

ホモ・ロクエンスという概念が初めて提起されたのは18世紀ドイツの哲学者ヘルダー (Johann Gottfried Herder, 1744-1803) による Herder (1772) であるとされている。ヘルダーは当時のキリスト教的世界観のなかで広く信じられていた「言語神授説」に対抗する形で「言語起源論」を提起した。「言語起源論」は Herder (1772) に多種存在する邦訳の題名としても採用されている。

同書において人間が自らの力で自然言語を獲得したことこそが人間を人間たらしめる根源の力であることが主張されている。ここではその内容について確認しておきたい。

旧約聖書「創世記」は、この天地とそこに生きる人と生き物すべてを神が創造したとする世界観を描いていた。「言語神授説」は人間の専横の能力である言語能力もまた創造主である神が人間に授けたものだとしていた。このことを最も強く主張したのは18世紀ドイツの統計学者ズユースミルヒ (Johann Peter Süßmilch, 1707-67) であった。彼は当時のドイツの出生率、男女比、平均寿命などのデータをもとに統計学的手法を用いてドイツの経年人口推移を算出してみせたことでも知られている (Süßmilch (1741))。彼は同時に敬虔なキリスト教の信仰を持つ神学者でもあったため、科学的計算によって導かれた人口推移を「神の秩序」と表現した。一方で彼はヨーロッパの諸言語の音韻がほぼ相互に対応する形で24種の音韻を有することに人間の自然言語の美しい秩序を見出し、この24種の音韻は神が人間に授けたものであると主張した。彼の統計学は教会の権威主義や聖書に対する原理主義に基づくのではなく、科学的視点から人間の社会や文化において美しい秩序が見いだせるものについてそこから神の意思を読み取るという経験科学的態度を取っていた。

しかしながら、言語に関しては、ズユースミルヒの視野は極めて狭すぎたと言わざるを得ない。ズユースミルヒは西欧の諸言語から人間の自然言語の音韻の秩序を見出していたが、彼が見ていたのはドイツ語や英語などのゲルマン語派と、フランス語やスペイン語などのロマンス語派の諸言語、要はインド・ヨーロッパ語族の言語に限られていたのである。これらが別の言語であるとは言え、音韻体系に近親性があるのは当然であった。

これに対してヘルダーは、北アメリカのアベナキ族の言語、ペルー語、アマゾン川流域の言語、シャム語等々、インド・ヨーロッパ語族以外の語族に属する諸語の単語や音韻が如何に多様であるかについて述べている。

例えば、次のような言及がある。アマゾン川流域の言語について「彼らが

三音節を声に出したように思えるような場合でも、そのためには少なくとも九あるいは一〇の音節を用いなくてはならない<sup>2</sup>」、エストニア語やラップランド語について「半分しか分節されていないような、書き取ることのできない音の響きをもっている<sup>3</sup>」と。

これらは音韻体系を構築する音素間の対立が個別言語によって全くまちまちであって、ほとんど対応していないことを物語っている。ズュースマルヒが言うような24種の音韻というのはインド・ヨーロッパ語族以外の言語には全く当てはまらないということである。ちなみにアマゾン川流域では今なお先住民言語であるムーラ諸語が話されている。そのうちの一つの方が近年、Everett (2008) によって色彩を表す語が存在しないことが注目されたピダハン語である。同書はピダハン語には音素の数が非常に少ないことにも言及している。なお、エストニア語やラップランド語は欧州の言語ではあるが、インド・ヨーロッパ語族ではなく、ウラル語族フィン・ウゴル語派に属する言語である。

未知の言語を記述する方法論が確立するのは、19世紀の言語学者ブルームフィールド (Leonard Bloomfield, 1887-1949) らによる構造主義言語学の台頭を待つことになる。そこではアメリカ先住民の部落に対してフィールドワークを敢行し、彼らが使用する未知の言語を採集しながらその音韻構造、文法構造を緻密に記述する方法論を確立していった。ヘルダーの場合は自らフィールドワークを行ったわけではなく、諸言語を知る他の人物の記述を引用する形を取っていたので、厳密さは後世に譲ることとなったが、それでも構造主義言語学の出現に先立つ18世紀にかくも広い視野で世界の諸言語を見ていた人物がいたことは驚嘆に値する。

ヘルダーは諸言語の音韻がかくも多様であることをもって、それらは神的起源によるものではなく、むしろ動物的起源によるものだと主張する。即ち、動物の唸り声のような段階からそれぞれの民族文化の生活慣習のなかから自然発生的に分節が行われ、そして同時に人間自らがそこに意味付与を行って自然言語を成立させていったというのがヘルダーの主張である。彼はこう述

べている<sup>4</sup>。

したがって、感覚のこの直接的な音声を言語と名づけようとするのであれば、私はその起源を当然ながらごく自然なものだと思う。それは単に超人的ではないというだけでなく、明らかに動物的なものだ。感覚を働かせる機械の自然法則なのである。

旧約聖書「創世記」では、人間は創造主である神がその姿に似せて創った被造物であるとしている。多くの生物のなかで唯一人間だけが神の似姿をしているという質的な隔絶が、人間と動物とのあいだを不連続性と捉えるキリスト教的世界観を形成していた。ズースミルヒの「言語神授説」もその世界観から必然的にもたらされる神学思想であったが、これに対してヘルダーは動物と人間の連続性を主張する形で対抗している。これは後の19世紀に登場する進化論を想起させるものでもあった。そのことは改めて後述することにする。

ヘルダーは神に似た人間の動物に対する優位性に反駁しながら、人間が言語を持つことの意味を説明していく。まず、人間が動物より劣点について次のように述べる<sup>5</sup>。

人間が本能の強さと確実さという点では動物たちよりはるかに劣っているということ、我々がかなり多くの種類の動物に関して生まれつきの技能や技能の衝動と呼んでいるものを人間はまったくもっていない(後略)

日本でも人間を「本能が壊れた動物」と評した岸田(1977)がその逆説的な表現で話題となったが、「壊れた」「劣った」とネガティブな表現を用いるところに人間の優位性に対する反駁が表現されている。たしかに鳥や蜂は本能で巣を作ることができるが、人間が何かを創造するには本能ではなく学習や経験を経てその能力を獲得していく。本能が欠けている分を補っているものは自由であるとヘルダーは考えている。そのことを主張する論述を4か所から抜粋して引用したい<sup>6</sup>。

(1) 動物の諸感覚が鋭ければ鋭いほど、また彼らの技による作品が素晴

らしければ素晴らしいほど、彼らの領域は小さく、彼らの技による作品は一様であるということだ。

(2) つまり、動物たちの生活範囲が小さければ小さいほど、彼らには言語は必要なくなる。

(3) 人間の感覚器官と組織は、ただ一つのものに対してだけ鋭敏にされているわけではない。人間はあらゆるものに対する感覚諸器官をもっており、したがって当然のことながら、個々のものに対しては、それだけ弱くて鈍い感覚しかもっていない—人間の魂の力は世界にあまねく拡げられている。

(4) ある被造物に特有の言語とは、その欲求や仕事の生活範囲に、その感覚器官の組織に、その表象の方向に、その欲望の強さにふさわしい言語以外の何だというのだろうか—

(1) と (2) は動物について、(3) と (4) は人間に関する記述である。動物は本能が優れている分、活動範囲が小さく、ゆえに言語を必要としない。一方の人間は本能が劣っている分、活動の自由度が高く、活動の範囲が大きい。人間は其中で生きていくための自由な欲望にふさわしいような言語を獲得したのだと述べている。本能と相補的な関係にあるのは言語であり、人間が自らを生かすために自然に獲得したのが言語なのだという。人間は神に創造されたから、あるいは神に言語を授けられたから尊いのではなく、生きていくために本能に代わる能力として自ら言語を獲得したことにこそ本質的な人間の尊さがある。これがヘルダーのホモ・ロクエンスなのである。

さらにヘルダーは、人間は自分自身が置かれている状況や環境をよく理解し、自らが生きるための本質的な方向へと能動的に向かっていく力を持っていると考えた。これを彼は思慮深さ (Besonnenheit)、あるいは反省機能 (Reflexion) と呼んでいる。この思慮深さによって人間は言語を発明したと述べている<sup>7</sup>。

人間は、その固有の思慮深さという状態に置かれ、この思慮深さ (反省機能) を初めて自由に働かせて、言語を発明した。いったい、反省機能

とは何だろうか？ 言語とは何だろうか？ この思慮深さとは、人間にとって特徴として固有のものであり、人間という種属にとって本質的なものである。したがって、言語も、自力による言語の発明も、また同様である。したがって、人間が人間であるのと同じように、言語の発明も人間にとっては自然なことなのだ！ 両方の概念をともかく展開してみよう！ 反省機能と言語を一

人間が自然に言語を獲得したとして、いったいどのような事情でどのようなことに起因して言語を獲得するに至ったのか。Herder (1772) の第二部では、それを四つの自然法則 (Naturgesetz) として述べている<sup>8</sup>。

(1) 第一自然法則 (Erstes Naturgesetz)

「人間は自由に思考する活動的な存在であり、その諸力は漸進的に作用し続ける。それゆえ、人間は言語の被造物である！」

(2) 第二自然法則 (Zweites Naturgesetz)

「人間はその使命において、群れをなす被造物、すなわち社会の生き物である。したがって、言語の形成を継続することは、彼にとって自然で本質的で必然的なことになる。」

(3) 第三自然法則 (Drittes Naturgesetz)

「人類全体が一つの群れのままでいるのが不可能だったのと同様に、人類全体が一つの言語を維持することはできなかった。したがって、さまざまな国民語が形成されることになる。」

(4) 第四自然法則 (Viertes Naturgesetz)

「人類がおそらく唯一の経済性における、唯一の起源による、漸進的な唯一のまとまりをなしているのと同様に、すべての言語もそうであるし、それにもなって形成の連鎖全体もまた同様である。」

第一自然法則では改めて人間の言語が自由で能動的な活動の学習と経験を繰り返して長い時間をかけて獲得したものであることを述べている。第二自然法則では人間が社会的存在であることからそのコミュニケーションの手段として言語を発達させたことを述べている。第三自然法則では人間の言語が

自然発生的であるがゆえに、一つではなく多様な個別言語として形成されていったことを述べている。これはズースミルヒの「言語神授説」への反駁の大きな根拠となっているのは先に見た通りである。第四自然法則では(個別言語へ分化しているとは言え)人類全体が単一の起源から単一の経済法則を経て同じように自然言語を進化させてきたことを述べている<sup>9)</sup>。このようにして人間が自らの経験と学習のなかから自然言語を獲得してきたことの価値は、単純に言語を神から授けられたとするよりも意義深く、尊いものであるとヘルダーは考えた。これが後に続くホモ・ロクエンスをめぐる諸論の原点である。

### 3. 自然言語における対立点の恣意性

ズースミルヒの「言語神授説」の誤りは言語の音韻の数を固定的で不変的なものと捉えているところにある。ヘルダーはそれに対して西欧以外の言語を引き合いに出して個別言語ごとに音韻の数は異なり、また、各言語における音素対立の異なっていることをもって反駁を行った。そのことを現代言語学の一般的理解の観点から検証しておきたい。

身近なところから言えば、日本語と中国語の音韻を対照するだけでも音素の対立点が全く異なることがわかる。日本語では子音に無声音(清音)と有声音(濁音)の対立があるが、中国語にはこれに相当する対立がない。いっぽう、中国語には無気音と有気音の対立があるが、日本語にはこれに相当する対立がない。調音点と調音方法によって音声の種類を区別して表記する国際音声字母(International Phonetic Alphabet, [ ]で表記)と各個別言語の音韻体系において区別されている音素(phoneme, / /で表記)とを用いてこれら表記することにする。歯茎破裂音を例にとり述べると、日本語では無声音[t] (音素/t/)と有声音[d] (音素/d/)は別の音素となるが、無気音[t]と有気音[tʰ] (ʰは気音を表す補助記号)とは同じ音素/t/の異音(allophone)となる。これに対して中国語では有気音[tʰ] (音素/t/)と無気音[t] (音素/d/)とは別の



音素となるが、無声音[t]と有声音[d]は同じ音素/d/の異音となる。この違いは日本語母語話者の中国語教育、中国語母語話者の日本語教育の双方において習得の難しい学習項目の一つとして知られている。人間の口腔の構造上、区別し分けられる音素の数は有限であるが、どの音声とどの音声を区別して別の音素と認識するか、その結果、当該言語に何種類の音素があるかについては個別言語ごとに大きく違っており、しかもそれらは偶然の要因に左右されて決定している。さらに同一言語内においても時間と共に変化することは現代言語学の常識となっている。例えば、日本語のハ行子音は上代では両唇破裂音[p]、中古から近世にかけては両唇摩擦音[ɸ]であった。現在のハ行子音の声門摩擦音[h]となったのは江戸時代末期から明治初期にかけてだとされている。言語神授説は人間の自然言語の音韻が先験的に固定されたものとする捉え方が前提となっていたが実態は全くそうではないことをヘルダーは論述したのである。

18世紀ドイツにおけるズースミルヒの「言語神授説」とヘルダーの「言語起源論」の対立は、19世紀フランスにおける主知主義とソシュール(Ferdinand de Saussure, 1857-1913)の記号論との対立を想起させる。時代を超えて類似の論争が起きたと言っても過言ではなかった。

主知主義は人間の理性を司る知性・意志・感情のうち、知性の価値を最も重視する立場で、その系譜はアリストテレスらの古代ギリシア哲学に始まり、トマス・アクィナス(Thomas Aquinas, 1225-74)に代表される13世紀中世キリスト教神学を経て、17世紀のポールロワイヤル文法に至るまで一貫する立場である。観念と言語の関係に関する主知主義の立場は人間にはまず観念があって、その観念に対して言語による名前が付与されると考える。具体例で言うと、我々人間はまず「水」の概念を持っていて、そこへ各個別言語によって“eau”, “agua”, “water”、日本語なら“mizu”といった名づけが行われると考える。

これに対してソシュールは「言語と観念とは同時に生まれる」と主張する。ソシュールは人間が文化のなかで使用する記号すべてがシニフィアン(sig-

nificant, 記号表象)とシニフィエ (signifié, 記号内容)によって構成され、両者を結びつけるコード (code) は当該言語ごとに恣意的に決定され、当該言語社会における約束事として共有されるとした。自然言語は言語形式である音声と文字をシニフィアンとし、意味をシニフィエとする記号であり、人間が使用する諸記号のうち最も複雑で精緻な記号である。

自然言語だけでなく人間の文化は記号に満ちあふれている。例えば、「貨幣」(紙幣・硬貨)は紙片・金属片(シニフィアン)が金銭的価値(シニフィエ)を表現する記号である。「時計」(シニフィアン)は時刻(シニフィエ)が表現された記号である。「楽譜」(シニフィアン)は音の高さや長さ(シニフィエ)が表現された記号である。

ソシュールは自然言語をはじめコミュニケーションの意図をもって生成される記号においてシニフィアンとシニフィエの関係は常に恣意的であるとした。これが言語記号の恣意性 (arbitrariness) である。ソシュールが論じた言語記号の恣意性の最大の論点は、単にシニフィアンとシニフィエとの対応関係における恣意性ではなく、言語記号どうしが相互に対立を有する際の関係性そのものの恣意性であった。わかりやすく言えば、概念の体系、すなわちどの概念とどの概念が区別されるか、どこに境界線が引かれるのか、における恣意性こそが最も重要だったのである(丸山(1983)等に関連記述あり)。

先ほどの「水」の例に戻る。日本語における「水」の概念には「冷たい」という属性が付与されており、「水」と「湯」とのあいだには対立がある。ある二人の会話でA氏から「そのポットに水が入っているよ」と伝え聞いたB氏がそのポットから液体を注いでみると摂氏90度の熱湯であったとする。B氏はほぼ間違いなく「これ、水じゃないよ、お湯だよ」と、A氏の誤りを指摘するであろう。つまり、日本語において90度の熱湯は「水ではない」のである。「水」と「湯」という二つの記号表象(シニフィアン)が対立するということは、「水」の概念と「湯」の概念との間にも境界線があり、異なるシニフィエを形成していることになる。そこでは「水」という語(シニフィアン)と「水」の概念(シニフィエ)との関係にも恣意性があり、「湯」という語(シニフィアン)と「湯」

の概念(シニフィエ)との関係にも恣意性があるわけだが、ソシュールが最も強調したかったのは、「水」と「湯」とのあいだに引かれた境界線そのものの恣意性であった。その証拠に英語では冷水も熱湯も区別なく“water”である。冷水と熱湯の対立を示すには形容詞“cold”か“hot”によって限定するほかなく、名詞のみで対立を示すことはできない。フランス語の“eau”、スペイン語の“agua”も同様である。「水」と「湯」とのあいだの境界線はあくまでも日本語という言語文化において恣意的に区別されたものに過ぎないのである。

別の例を挙げよう。フランス語の“papillon”と英語の“butterfly”はどちらも日本語では「蝶」と訳されることが多いが、両者の概念は同じではない。なぜなら“papillon”は蝶だけでなく蛾も含むのに対して、英語の“butterfly”は蝶だけを指して“moth”(蛾)と対立しているからである。この事情は言語によってまちまちで、スペイン語では“mariposa”(蝶)と“polilla”(蛾)の区別はあるが、ドイツ語の“Schmetterling”は蝶も蛾も含む。勢力範囲が異なればその全体から一般化されるところの概念もまた異なるものとなる。英語の“butterfly”には美しさや優雅さといった属性が付与されているが、フランス語の“papillon”やドイツ語の“Schmetterling”は美しさにおいて中立的である。鈴木(1990)ではゲーテの詩に登場する“Schmetterling”が美や優雅ではなく憂愁や悲哀を表現していることから「蝶」と訳すべきでないとして述べている。それぞれの言語文化においていかなる概念形成がなされるかということといかなる名称が付与されるかということは表裏一体であって、文化の異なりと言語の異なりとは相即の関係にある。これもヘルダーが第一自然法則や第四自然法則で述べているように長い時間の経験の蓄積を経て、当該文化のなかで概念形成と語の成立が同時進行で漸進的に成立していくのである。

こうして考えてみると、概念の成立は語の成立以前に先験的に形成するものであり得ないことは確実だが、その結果として語彙の体系が当該言語話者の世界観と相即の関係にあることを主張するのが言語相対性仮説(hypothesis of linguistic relativity)である。この仮説はアメリカの言語学者サピア(Edward Sapir, 1884-1939)とウォーフ(Benjamin Lee Whorf, 1897-1941)に

よって提唱された学説であるため、サピア=ウォーフの仮説 (Sapir-Whorf hypothesis) とも称される。言語はその話者の世界観を決定するとする仮説であり、「言語が観念を決定する」としたソシュールの理論と本質的に一貫している。

サピア=ウォーフの仮説ではエスキモー語には雪に関する 400 以上の語彙があることが指摘されている。つまり、それらは異なるものと認識されているということである。日本語で言えば雪、霰(あられ)、雹(ひょう)は異なる名称が付与されているからそれぞれ別の物と認識されていると言える。しかし、粉雪(こなゆき)、牡丹雪(ぼたんゆき)、細雪(ささめゆき)はいずれも限定語句の付加によって雪のなかで指示対象の範囲が狭められてはいるが、あくまでも雪は雪である。しかしエスキモー語ではそれらは全く別の実体として捉えられ、それどころかもっと細かく区別されて認識されている。

逆に日本語には魚の種類に関する語彙が極めて豊富であり、稚魚から成魚へと成長する間に何度も名前を変える出世魚もある。例えば、ボラという魚はオボコ→イナ→ボラ→トドと4種の名前に変化する。日本は漁業国であり、魚は日本人の食生活に密着した存在だったがゆえにそれだけ多くの境界線をもって区別が認識されてきたのである。

こうした語彙の対立は言語文化のなかで長い時間をかけて漸進的に慣習化し、成立していくものであるが、当該言語文化において幼児が言語を獲得していく過程を見ると、それは決して漸進的ではなく、親や環境から異なる語彙を与えられることによってそれらから異なる概念を形成していくことになる。

ヘルダーは恣意性という言葉を用いてはいないが、彼の主張は音素と音素の対立そのものが恣意的であることを指摘したものであった。同様にソシュールは語と語の対立における恣意性を主張した。言語相対性仮説も様々な論点からの批判・論争があったものの、ソシュールの言う恣意性の観点からはそれを継承し、補強する学説であったことは確かである。これらをすべてヘルダーのホモ・ロクエンスの系譜のなかに位置づけることが可能である。

#### 4. 神学の展開とホモ・ロクエンス

18世紀においてヘルダーはズュースミルヒの「言語神授説」に対するアンチテーゼとして「言語起源論」を提起した。その時代背景を確認する意味で西欧における哲学・科学とキリスト教神学とのあいだの相克の歴史について簡単に振り返っておきたい。

キリスト教が成立した1世紀から9世紀頃までの時代においてキリスト教神学は哲学より常に優位に立ち、哲学は古典テキストに忠実に従うことによって神学を証明する役割を担った。この時代の哲学は教父哲学と呼ばれる。

10世紀頃からルネサンス期である15世紀半ば頃までは教父哲学に代わってスコラ哲学の時代と呼ばれる。スコラ哲学は当時の欧州のキリスト教修道院付属の学院や大学で興隆した哲学である。これはキリスト教神学における神の啓示と古代ギリシアの哲学、とりわけアリストテレスの哲学との融合を図り、そのことを通じて理性と信仰の総合を図ったもので、その代表的人物はトマス・アクィナスである。

スコラ哲学における哲学と信仰の融合はキリスト教の信仰を持った科学者たちによる科学と神学との融合も含まれていた。それは科学と神学との間の矛盾に対する葛藤であり、その超克であった。それを象徴するのがいわゆるコペルニクスの転回である。古代から中世にかけては天球が地球を中心に回転するとする地球中心説(天動説)が信じられていた。人々は旧約聖書「創世記」第1章に記された「天地創造」の世界観を信じるがゆえに地球中心説を支持していたのである。その世界観を大きく転回させたのが16世紀に登場したポーランドの天文学者コペルニクス(Nicolaus Copernicus, 1473-1543)であった。彼は自らが観測した天体の動きに対して緻密な計算を行い、太陽中心説(地動説)を提唱するに至った。コペルニクスは敬虔なクリスチャンであり、教会の司祭でもあったがゆえに自身の学説をもって従前の神学を否定することはなかった。彼は、神が創造した宇宙であるならばより整然とした計算によって説明がなされるような秩序立った美しい宇宙を創造するはずとの確信

を持っていたがゆえに、太陽中心説（地動説）と神学は矛盾しないと主張したのである（村上（1986）等）に関連記述あり）。

コペルニクスの学説を継承し、発展させたドイツの天文学者ケプラー（Johannes Kepler, 1571-1630）もまた同様に厚いキリスト教信仰を持っていた。彼は惑星の運動に関する三つの法則を神への信仰に基づいて発見したのである。彼らによる科学革命は神学と科学との矛盾を止揚し、超克しながら遂行させてきたと言える。

17世紀にはフランスに哲学者であり数学者でもあったデカルト（René Descartes, 1596-1650）が出現する。彼は〈自我〉は空間内の実在は証明できないが、自己の思惟そのものにおいてその実在を証明できると考え、そのことを端的に“Cogito, ergo sum”（我思う故に我あり）との命題で表現した。彼のこの命題は「物心二元論」の元となり、科学が精神的要素を排除するための理論的根拠として活用された。真実をデータに語らせる経験科学の手法が徹底され、それを支える数学的方法論も確立していった。そこでは客観性、追試可能性（誰が検証しても同じ結果になること）が重視された。こうした方法論の確立の結果、近代科学は飛躍的に発展した。この時代の科学革命が今日の科学技術社会の基礎を形成した時代でもあった。このような時代背景のもと、漸く理性と信仰との分離、科学と神学との分離が模索されるようになっていく。

本稿で主に取り上げたヘルダーが登場する18世紀は、こうした科学革命の延長上に到来した産業革命の時代である。蒸気機関の発明に象徴される産業革命が英国を中心に勃興し、西欧社会は一気に工業化が急速に進んだ時代であった。

ヘルダーはズュースミルヒの「言語神授説」を批判し、否定したが、当のヘルダー自身も敬虔なキリスト教徒であり、神学者でもあった。しかし、彼は幼少期から知識を重視し、ケーニヒス大学在学中は哲学の講義を担当したカントの影響を大きく受けるなど、徹底的な合理的思考を追求し続け、その信念を譲ることはなかった。彼にとっては合理性の追求こそが神の証明になる

と信じていたのである。言語学は人文科学であり、自然科学とは方法論が異なるが、それでも Herder (1772) では事実を積み重ねる合理的思考によって説得的な主張をなしており、その意味では彼の立場はスコラ哲学の時代にコペルニクスやケプラーが経験した科学と神学との葛藤と超克に非常によく似ていた。

続く19世紀に世界観の変革をもたらしたもう一つの大きな科学革命が進化論であった。英国の自然科学者ダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809-82) はすべての生物が共通の祖先から変異と自然適応を繰り返して長い時間をかけて進化したとする進化論を提唱した。この学説は、「神がヒトの起源であるアダムとイブを創造した」とする旧約聖書「創世記」に基づくキリスト教の世界観を大きく揺るがすものとなった。特に人間と他の動物の不連続性から人間の尊厳を説く従前の思考からは「人間がサルから進化した」とすることは容認できず、米国では最近まで学校で進化論を教えることを禁止する地域もあった。

しかし、これも20世紀末の1999年にローマ法王ヨハネ・パウロ2世が談話を発表し、ダーウィンの進化論はカトリックの教えと矛盾しないと表明している。科学それ自体は信仰の呪縛に留まることなく合理的に発展し、神学はそれを段階的に止揚する形で統合し、矛盾を超克する歴史を繰り返してきたと言える。

ヘルダーの「言語起源論」はダーウィンの名著である Darwin (1859) より約80年先行しているが、それが当時の西欧社会に与えた影響という点では酷似している。ある意味進化論登場の予兆と言っても過言ではなかった。

## 5. ホモ・ロクエンスを標榜する諸説

それ以降、多くの人物がホモ・ロクエンスを主題とする著書を著している。ヘルダーと同じ18世紀ドイツの哲学者J.F. ブルーメンバッハをはじめ、20世紀では英国の音声学者D. フライ、フランスの言語学者C. アジェージェ、イタ

リアの哲学者C.モンタレオーネなどにホモ・ロクエンスを主題とする著書があるほか、文化人類学者C.レヴィ＝ストロースも諸著書でホモ・ロクエンスに言及している。

これらに共通しているのは人間の自然言語が極めて特殊で高度な能力であるという揺るぎない事実を大前提として、その能力の本質についてそれぞれの専門領域の立場からアプローチするものとなっている。

例えば、Fry (1977) では人間の知性を構成するより原初的な能力は概念形成能力とその交換によるコミュニケーション能力であるとして、それを可能にする言葉の理解・習得過程について言語学・音声学の観点から考察している。Hagège (1985) では、人間の最も際立った能力は他者との対話を成立させる適性能力であり、そのための社会的コードを他者との間で共有する能力であるとしている。それゆえホモ・サピエンスよりもホモ・ロクエンスこそが人間の本質であると主張している。Montaleone (1998) では、人間にとっての言語的真実といわゆる客観的真実との異なりについて考察している。ここでも人間の自然言語のもととなっている概念形成能力を認識哲学の観点からアプローチしたものとなっている。

要するにこれらの諸論考は人間の自然言語の本質を概念形成能力にあるとする点で共通しており、それらはいずれもホモ・ロクエンスの原典たるヘルダーの説から派生したものと言える。以上の観点から本稿ではヘルダーの学説を集中的に考察したが、ホモ・ロクエンスをめぐる他の諸論考については今後稿を改めて論述することにした。

[注]

- 1 過去にホモ属に属したとされる種の学名。ホモ・ハビリスは230万年～160万年前、ホモ・エレクトゥスは190万年～2万年前に存在していたとされるが、いずれも絶滅した。
- 2 Herder (1772) 宮谷訳 (2017) p.20
- 3 Ibid. p.21
- 4 Ibid. p.27



- 5 Ibid. p.33
- 6 (1) Ibid. p.34 (2) , (3) Ibid. p.36 (4) Ibid. p.37
- 7 Ibid. p.50
- 8 (1) Ibid. p.120 (2) Ibid. P.139, (3) Ibid. p.151 (4) Ibid. p.162
- 9 Forster ed. (2002) による英訳では、原文の第四法則中の“Bildung” (形成) を“civilization” (文明) と意識しており、本稿としてもそれを参考に解釈した。

[参考文献]

- 池田大作 (1973) 「スコラ哲学と現代文明」『池田大作全集』第1巻 (1988) 聖教新聞社所収、377-391
- 岸田秀 (1977) 『ものぐさ精神分析』青土社
- 鈴木孝夫 (1990) 『日本語と外国語』岩波新書
- 丸山圭三郎 (1981) 『ソシュールの思想』岩波書店
- 丸山圭三郎 (1983) 『文化記号学の可能性』日本放送出版協会
- 村上陽一郎 (1976) 『近代科学と聖俗革命』新曜社
- 村上陽一郎 (1986) 『近代科学を超えて』講談社学術文庫
- 山岡政紀 (2009) 「人間学の探究 (2) ～人間の定義 (その1) ～」『創価人間学論集』第2号、創価大学人間学会、109-125
- Barthes, Roland (1964) *Essais critiques*, Paris: Éditions du Seuil.
- Bergson, Henri (1907) *L'évolution créatrice*, Paris: Les Presses universitaires de France.
- Blumenbach, Johann Friedrich (1779) *Handbuch der Naturgeschichte*, Göttingen: Johann Christian Dieterich.
- Darwin, Charles (1859) *On the Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life*. London: John Murray. (邦訳：ダーウィン著、八杉龍一訳 (1990) 『種の起源 (上・下)』岩波文庫)
- Eliade, Mircea (1976) *Histoire des croyances et des idées religieuses*. Payot.
- Everett, Daniel (2008) *Don't Sleep, There are Snakes: Life and Language in the Amazonian Jungle*. New York: Pantheon Books. (邦訳：エヴェレット著、屋代通子訳 (2012) 『ピダハン「言語本能」を超える文化と世界観』みすず書房)
- Frankl, Viktor E. (1950) *Homo Patiens: Versuch einer Pathodizee*, Wien: Franz Deuticke.
- Fry, Dennis (1977) *HOMO LOQUENS; Man as a Talking Animal*. Cambridge: Cambridge University Press. (邦訳：フライ著、梶矢好弘訳 (1980) 『ホモ・ロクエンス——ことばを話す動物としての人間』こびあん書房)

- Hagège, Claude (1985) *L'homme de paroles: contribution linguistique aux sciences humaines*, Paris: Fayard.
- Herder, Johann Gottfried (1772) *Abhandlung über den Ursprung der Sprache*, Berlin: Voß (英訳: Forster, Michael N. ed. (2002) *Treatise on the Origin of Language*, in *Philosophical Writings: The most important philosophical works of the early Herder available in English*, Cambridge: Cambridge Univ. Press) (邦訳: ヘルダー著、宮谷尚美訳 (2017) 『言語起源論』講談社学術文庫)
- Huizinga, Johan (1938) *Homo Ludens, a study of the play element in culture*, Boston: Beacon Press.
- Kant, Immanuel (1781/1787) *Aufgabe der Kritik der reinen Vernunft*, (邦訳: カント著、原佑訳 (1966) 「純粹理性批判 上」『カント全集第4巻』理想社、カント著、原佑訳 (1973) 「純粹理性批判 下」『カント全集第6巻』理想社)
- Lévi-Strauss, Claude (1958) *Anthropologie structurale*, Paris: Plon. (邦訳: レヴィ＝ストロース著、荒川幾男他訳 (1972) 『構造人類学』みすず書房)
- Linné, Carl von (1735) *Systema naturae, sive regna tria naturae systematice proposita per classes, ordines, genera et species*.
- Montaleone, Carlo (1998) *Homo loquens: Persone contesti credenze*, Milano: Raffaello Cortina Editore.
- Saussure, Ferdinand de (1916) *Cours de linguistique générale*, Payot. (邦訳: ソシュール著、小林英夫訳 (1972) 『一般言語学講義』岩波書店)
- Smith, Adam (1776) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, London: Methuen.
- Süßmilch, Johann Peter (1741) *Die göttliche Ordnung in den Veränderungen des menschlichen Geschlechts, aus der Geburt, Tod, und Fortpflanzung desselben erwiesen*, Berlin: Verlag Daniel August Gohls. (邦訳: ズユースミルヒ著、高野岩三郎・森戸辰男訳 (1969) 『神の秩序』栗田出版会)
- Süßmilch, Johann Peter (1766) *Versuch eines Beweises, daß die erste Sprache ihren Ursprung nicht vom Menschen, sondern allein vom Schöpfer erhalten habe*, Berlin. (『最初の言語が人間ではなく創造主のみにその起源をもつことを証明する試み』)